

阪神・淡路大震災の記録



日本銀行神戸支店

Bank of Japan Kobe Branch

震災直後の様子

- ◆ 当店の建物は堅牢で、建物自体に大きな損壊はありませんでしたが、金庫内は現金収容箱が崩れ落ち、事務室は書類が散乱してキャビネットや机が倒れるなど、大変な状態でした。



当日の金庫内の様子



事務室の様子



日本銀行神戸支店

Bank of Japan Kobe Branch

現金供給体制の確保

- ◆ 災害が発生した際に重要なことは、水道や電気と並ぶライフラインである「お金」を円滑に供給することです。震災当日も、朝7時には支店長以下10数名が当店に駆けつけ、開店の準備をし、通常どおり午前9時から窓口業務を開始しました。
- ◆ また、朝7時半過ぎには本店との電話回線を確保しました。自家発電が機能しなくなったため、使用不能となったシステム処理の代行を本店に依頼しました。



隆起した内玄関

駆け付けた職員は、停電で真っ暗な
店内にここから入店しました



日本銀行神戸支店

Bank of Japan Kobe Branch

現金供給体制の確保（続き）

- ◆ 市中金融機関に対し、当店は通常どおり営業を開始し、現金の引き出しが可能であることを連絡しました。市中金融機関の当店からの現金の引き出しは、当日こそ皆無でしたが、震災後3日間で約900億円の現金を支払いました。
- ◆ このほか、震災当日が給料日だった2官庁に対して、3千万円を支払いました。官庁数と金額は大きくありませんが、仮に当店が現金を支払うことができなかった場合、「最後の頼みの綱である日銀も現金を支払ってくれない」という噂が広がり、パニックにも繋がりがかねないだけに、その意義は大きかったといえます。

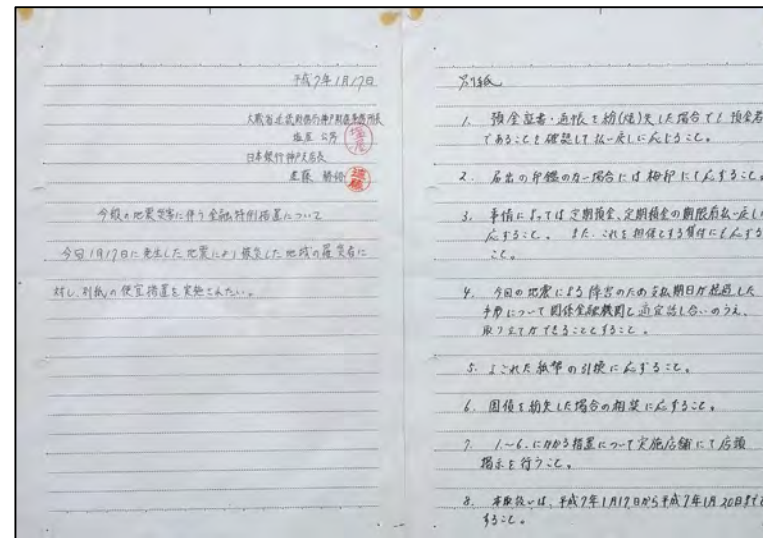


日本銀行神戸支店

Bank of Japan Kobe Branch

災害被災地域の金融機関等に対する 金融特別措置の要請

- ◆ 震災当日には、被災者の混乱を回避するため、各金融機関に対して、通帳や印鑑を紛失した場合でも、預金者であることを確認して払い戻しに応じることなどを、大蔵省（現財務省）近畿財務局神戸財務事務所長と日本銀行神戸支店長との連名で要請しました。通知文は手書きで作成され、神戸財務事務所長の印鑑は赤ペンのサインで代用しました。



金融特別措置



日本銀行神戸支店

Bank of Japan Kobe Branch

損傷したお金の引換え

- ◆ 地震による火災などで傷んだお金の引換えは、繁忙を極めました。事業資金が燃えてしまった経営者の方やお年玉が灰になってしまった子どもさんなど、窓口にいらいちゃった際は一様に沈みがちでしたが、新しいお金を受け取られると笑顔で帰って行かれました。この引換えは、約半年間で1,800件、8億円（銀行券14万枚、貨幣113万枚）に達しました。



燃えてしまったお札の鑑定作業



燃えて灰になってしまったお札

ある程度までは、紙やインクの質から本物であることが特定できます

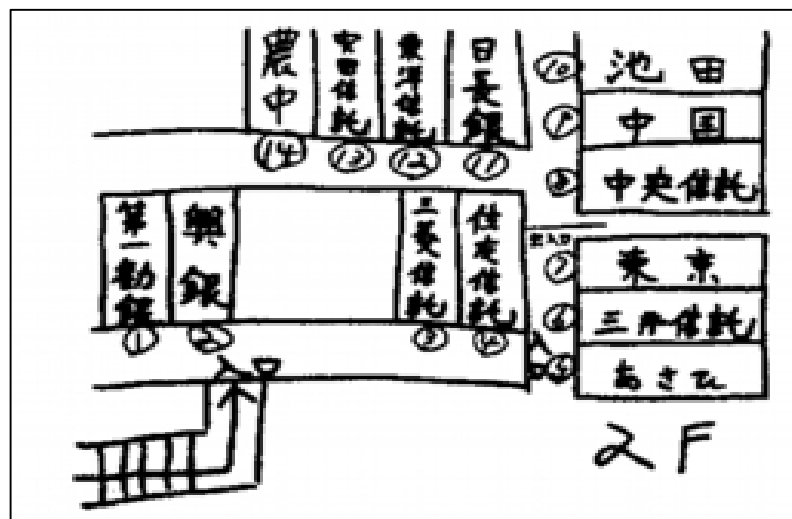


金融機関の臨時窓口設置

- ◆ 店舗が倒壊した金融機関（14行庫）に対して、当店は臨時窓口を提供しました。この措置は1月20日～2月3日まで続けられ、この間の来店客数は約3千名、そのうち約半分の方が預金を引き出し、引き出し額は合計で15億円に達しました。



臨時窓口案内のために並んだ
金融機関の皆さん



金融機関臨時窓口の案内図



日本銀行神戸支店

Bank of Japan Kobe Branch

手形交換の再開

- ◆ 震災直後の神戸手形交換所は、隣のビルが倒れかかっているために入ることが出来なかったほか、金融機関の店舗倒壊や渋滞等もあって、神戸市内の手形交換は休止せざるを得ませんでした。しかし、決済システムを一日も早く再開する必要があったため、1月24日に、さくら銀行栄町支店の会議室を使用して、手形交換が再開されました。再開に当たっては、大阪手形交換所に滞留していた未決済の手形・小切手を、パトカーの先導を受けながら神戸に搬送しました。
- ◆ このように、日本銀行や市中金融機関、官庁など多くの関係者では、その大半が自らも被災者でありながら、金融システムの安定に向けて懸命に努力しました。その結果、取り付け騒ぎや銀行破綻といった大きなパニックが回避され、被災者のライフラインである「お金」への信頼も維持されました。



日本銀行神戸支店

Bank of Japan Kobe Branch